自己の内なる問題と向き合う国語教室の実際
――単元　一句との出会い　心ひかれる季節のことば（中学校三年）の場合――

伊木　洋

はじめに

学習者一人ひとりがいきいきと学ぶ国語教室を創造したい。主体的に学習に打ち込むことを通して、豊かな言語生活を育む力を体得させたい。そのために大村はま先生の国語教室に学び、学習者一人ひとりを優劣のかなたに導き、学習のプロセスがそのまま学習力となる単元を構想し実践を試みてきた。学習者の実態をふまえて指導目標を明確化し、学校図書館を活用して多様な学習材を準備し、目標達成にふさわしい言語活動を設定するよう心がけてきた。そのうえで、学習を真に学習者一人ひとりにとって価値あるものとするために、学習のてびきを用意して、ことばの学びを通して自己の内なる問題を発見させ、課題を解決させていくことを大切にしてきた。さらに、学び得たこと・考え（させられ）たこと・心ひらかれたことなどを学習記録に記すことによって、自らの学びを見つめさせ、自己評価力を育て、自己学習力を身につけさせていくことを重視してきた。

一　自己の内なる問題と向き合うことの重要性

橋本暢夫氏は、『月刊国語教育研究　五一五』の巻頭言で、豊かな言語生活を育むために必要な四項目を示している（注1）。

①目標に即した「生活的な実の場」の設定
②絶えず「問題を発見」させる豊かな媒材と手引き
③一人ひとりの課題を克服させていく「自己評価力」への配意
④「学習のプロセスがそのまま学習力となる」営み

橋本暢夫氏は、豊かな言語生活を育むために、問題を発見させ、一人ひとりの課題を克服させていくことの重要性を指摘し

ている。

現在、学習者一人ひとりを主体的・能動的な学びに導くアクティブ・ラーニングが求められている。豊かな言語生活を育むことを目標とする国語科においては、学習を主体的・能動的なものとし、真に学習者一人ひとりのものとするために、学習方法の工夫とともに自己の内なる問題を発見させ、課題を解決させていくことが重要であると考える。

本稿では、豊かな言語生活を育むことを目指して実践してきた単元の中から、「単元　一句との出会い―心ひかれる季節のことば（中学校三年）―」をとりあげ、単元の実際に即して、学習者が内なる問題とどのように向き合ったかということについて考察を試みる。

二　自己の内なる問題と向き合う学習指導の実際

単元　一句との出会い―心ひかれる季節のことば―

（一）単元をはじめるまで

平成九年六月、米子市立湊山中学校において、「単元　この一首をあの人に（二年生）」を試みた（注2）。図書館の資料を活用して短歌を選び、その中の一首をだれかに贈るという学習指導であった。

平成一〇年六月、米子市立湊山中学校において、「『うた』に託して思いを伝える学習指導の試み　―単元　俳句を楽しむ　この一句をあの人に（三年生）―」を実践した（注3）。俳句を集め、贈りたい相手を決めて、一句を贈る。その際、贈りたい理由を添えるという学習指導であった。この二つの学習では学校図書館では十分な資料を準備できないため、近隣の米子市立図書館との連携を図り、学校図書職員の加藤道子先生のお力添えを得て、必要な資料を米子市立図書館から運んでいただいて実践した。

この二つの学習指導を通して気づいたのは、おもしろいことに、学習者の多くが、だれかへ向けて贈るという設定を利用して、実際は自らに贈る一句を選んでいたということであった。すなわち、学習者は自らへ贈る一句との出会いを求めており、自ら心ひかれる一句を選んでいたのである。この単元では、こうした成果をあげつつ、俳句という言語文化の特色である季語への着目が十分でないという点が気にかかっていた。

平成一四年六月、米子市立後藤ヶ丘中学校において、季語を起点とする「単元　一句との出会い　―私の出会ったこの一句―（三年生）」を行った（注4）。米子市は学校図書館資源共有型

モデル地域事業の指定を受け、米子市の公用車による団体貸し出しが可能となった。学校図書職員の福永孝子先生のお力添えを得て、米子市立図書館や米子市児童文化センターから歳時記などの資料を集めて実践した。

平成一六年一〇月、米子市立後藤ヶ丘中学校において、学校図書職員、田中静子先生のお力添えのもと「伝統的な言語文化への関心を深める学習指導の試み　―単元　和歌を受け継ぐ―（三年生）」を実践した（注5）。短歌、俳句といった短詩形の言語文化の源流となる和歌への関心を深めることをねらいとし、心ひかれる和歌と出会わせ、朗読から暗唱へ発展させていった。

本稿でとりあげる「単元　一句との出会い　―心ひかれる季節のことば―」（三年生）は、こうした先行実践の積み重ねをふまえて、平成二一年七月、米子市立東山中学校において実践したものである。学校図書職員の鹿島郁子先生のお力添えを得て、学校図書館はもとより、米子市立図書館をはじめ、他の中学校、小学校の図書館から、携帯俳句やブログ俳句などの新しい文献を含め、豊富な資料を集めていただいた。

学校図書館に歳時記などの資料がそろったところで、学習のてびきにそって、まず、自らの好きな季節を選んだ。次に、選んだ季節の歳時記を実際に手にとり、目次を読んで、その季節の季語の中から心ひかれる季語を拾っていった。そのうえで、その季語のページをめくり、その季語の詠みこまれた句の中から、これはと思う句を集めていった。

ついで、集めた句の中からとりわけ心ひかれた一句を選び、その理由を記させた。心ひかれた一句との出会いを通して自己の内なる問題を発見させ、課題の解決を図っていくことを目指して、どのことばにどのような思いがこめられていると感じたかを記すことができるよう、てびきをくふうした。自分がその句のどのことばとどのように出会ったのかを記すことを契機として、自己の内なる問題を自覚的にとらえさせたいと考えた。

さらに、一句を清書し、清書したものを実際に示しながら、春夏秋冬の季節ごとに全体の場で発表し合い、コメントを書き合う交流の場を設定した。

さいごに、自己評価の場として、学び得たことを学習記録に記し、学習のまとめとした。

創作は発展的な学習として位置づけており、取り組んでみたい学習者には、創作した作品を出品する場があることを具体的に知らせて、意欲を喚起することとした。

（二）　学習指導の実際

1　単元　一句との出会い―心ひかれる季節のことば―

2　対象　鳥取県米子市立東山中学校三年一組・三年四組

3　実施年月　二〇〇九（平成二一）年七月（全五時間）

4　単元目標

（1）俳句という言語文化の特質を学び、俳句についての関心を高め、尊重し、継承していこうする態度を育てる。

（2）一句との出会いを求めて、学校図書館を利用し、その機能を効果的に活用する能力を身につけさせるとともに、読書を生活の中にとり入れ、自己を向上させようとする態度を育てる。

（3）俳句における季語や一語一語の重みを実感し、ことばへの関心を深めることができる。

5　学習材　ブックリスト参照

6　学習指導の構想

第一次　俳句の特質を知る　（一時間）

①俳句という日本の伝統的な言語文化の特質を知る。

第二次　第一句との出会い　（三時間）

①好きな季節を選び、歳時記から心ひかれる季語を拾う。

②選んだ季語を詠みこんだ句を集め、その中から心ひかれた一句を選ぶ。

③心ひかれた理由（どのことばにどのような思いがこめられているか）を書く。

④清書する。

第三次　発表会、コメントの交流、学習を整理する（一時間）

①私の出会ったこの一句を発表し合う。

②コメントを書き合う。

③学習全体を通して、学び得たことを書き、学習記録を整理する。

7　各時間の学習指導の実際

第一次　俳句の特質を知る　（一時間）

①俳句という日本の伝統的な言語文化の特質を知る。

第一次は、俳句という日本の伝統的な言語文化の特質を理解する時間として位置づけた。俳句が季語を有するのは、俳諧連歌の発句から成立した経緯を持つためであることを説明し、2学期を見通して、芭蕉との関連に触れておいた。

俳句の味わいを実感させるために、三好達治の「街頭の風を売るなり風車」をとりあげた。まず、「街頭、風、売る、風車」の四つのことばを板書し、四つのことばを使って短文を作らせ

た。ほとんどの学習者が「風が吹く街頭で風車を売る。」というように多少の違いはあっても、「風車を売る。」という意味の文を作成した。

そのうえで、達治の句「街頭の風を売るなり風車」を板書すると、教室は一瞬静かになり、その後学習者の多くが納得した表情になった。もちろん本当に「風を売る」ことなどできるはずもなく、このことばだけを取り出せば、矛盾した表現（とりあわせ）であるといえる。しかし、達治のこの句の中における「風を売るなり風車」という表現には実感があり、「なるほど、なんとなくわかる」と感じられる。それどころか、「風を売るなり風車」という表現が、かえって「なんかいい、味がある、おもしろさがある」と感じられる。矛盾ということばは、つじつまがあわないという意味をもち、マイナスのイメージに使われることが多いが、俳句という言語文化においては、一見矛盾する表現が実感をもったとき、かえって味わいを生み出す場合があることを指導した（注6）。

ついで、教科書に取りあげられている句を学習者とともに読み味わっていった。取りあげた句は、飯田龍太の「どの子にも涼しく風の吹く日かな」、野澤節子の「せつせつと眼まで濡らして髪洗ふ」、大峯あきらの「虫の夜の星空に浮く地球かな」、尾崎放哉の「咳をしても一人」津沢マサ子の「灰色の象のかたちを見にゆかん」などであった。それぞれの俳句の季語と季節、有季定型、自由律俳句、無季俳句などの知識、切れ字、擬態語、体言止めなどの効果的な表現技法についても、それぞれの句をふまえつつ指導した。

学習者の一人であるN・Iさんは、第一次の学習を終えて、次のように記している。

俳句は、あってるまちがってるではなくて、味があるかが重要なことだと思いました。

俳句はイメージで伝わってくるので、自然と頭に残るし、たくさん読んでもあきないのですごいです。

（国語学習記録「気持ちを言葉に」　米子市立東山中学校三年四組　N・I　二〇〇九年七月九日）

N・Iさんは、「俳句は、あってるまちがってるではなくて、味があるかが重要なことだ」と記しており、俳句という言語文化の味わいを感じとっている。また、「俳句はイメージで伝わってくるので、自然と頭に残る」と述べ、俳句の持つイメージの豊かさをとらえている。

第二次　一句との出会い―心ひかれる季節のことば―

（三時間）

①好きな季節を選び、歳時記から心ひかれる季語を拾う。
②季語を詠みこんだ句を集め、その中から心をひかれた一句を選ぶ。
③心をひかれた理由（どのことばにどのような思いがこめられているか）を書く。
④清書する。

第二次では、学校図書館を利用し、歳時記などの資料を活用して、季語を起点として俳句を集め、一句を選ぶ学習活動を設定した。ここでは、学習者一人一人が主体的・能動的に学習を進めていくことができるように、学習のてびきを用いて学習を進めていった。てびきとともに、ブックリストを配布し、俳句を創作する際に用いる専門的な文献や小学生でも活用できる文献も用意してあるが、いずれもその内容は充実したものであり、学習を進めるうえで参考になるものばかりであると説明を添えた。そして、引用文献をメモする際の参考にするよう伝えておいた。

まず、好きな季節を選び、その季節が好きな理由を書かせた。四季それぞれに豊かな味わいがあるからこそ、季節ごとの味わいを楽しむことができ、好きな季節を選ぶこともできる。一人ひとりの季節に対する感覚を学習の起点に据えたいと考えた。

次に、自らの好きな季節のことばにはどのようなものがあり、どのようなことばが大切にされてきたのかということに関心を持たせたいと考え、歳時記と出会わせることにした。好きな季節の歳時記を一人ひとりに手渡し、心ひかれる季語を拾ってメモさせていった。初めて出会う季語、印象的な季語、興味を持った季語、自然にたくさんの季語と出会い、その中から自ら心ひかれる季語を選んでいくのである。

さらに、自らが心ひかれた季語を詠みこんだ句を集めるために、学習者一人ひとりが歳時記や文献を読むことに没入し、たくさんの俳句と出会っていく。

そして、その中から発表会で紹介したい、とりわけ心をひかれた一句を選んで、心ひかれたことばとその理由を書かせていった。心ひかれた理由を書くことを契機として、自己の内なる問題を発見させ、一句との出会いを通して課題の解決を図っていく体験をさせたいと考えた。

ここで用いた学習のてびきは次のようである。

学習のてびき　三年（　　）組（　　）番（　　）

一句との出会い

一　学習のすすめ方はこのように

1　好きな季節

・私の好きな季節は、（　　）です。

・私がこの季節が好きなのは、（　　）

・私はこの季節の（　　）好きなのです。

2　季語との出会い

・歳時記をめくっていて、（　　）の季語にこんなのがありました。

季節	季語
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）

3　この季語の読まれた句の中で、私はこの句に心ひかれました。

俳句	俳人
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）
（　　）	（　　）

4　とりわけ心ひかれた句は、次の一句です。

（　　）（　　）

・この一句に心ひかれた理由は、この句の

（　　）ということばに、

（　　）

思いがこめられていると感じるからです。

5　引用文献

書名、編著者名、発行所、発行年月日、引用ページ

歳時記を読んで、心ひかれる季語を拾う場面では、「彼岸西風」「冬紅葉」など、辞書で季語の意味を調べる学習者の姿が見られた。自らの好きな季節のことばにこんなことばがあったと、新しく出会った季節のことばを紹介してくれる学習者もいた。

とりわけ心ひかれた一句を選ぶにあたっては、その句のどのことばに着目し、着目したことばにどのような思いがこめられていると感じたのかという理由を記すようてびきをくふうした。ことばをふまえつつ、その一句に心ひかれた理由を書くこ

とは、自己の内なる問題に気づく契機となり、一句との出会いを通して課題の解決を図っていくことにつながると考えた。そうすることによって、一句との出会いが学習者一人ひとりにとって切実な意味を持つものになることを願った。

　春が好きというT・Nさんが記したメモは、次のようである。

1　好きな季節

・私の好きな季節は、（　春　）です。

・私がこの季節が好きなのは、（ぽかぽかしているからです。）

・私はこの季節の（ふかふかに干したふとんが）好きなのです。

2　季語との出会い

・歳時記をめくっていて、（　春　）の季語にこんなのがありました。

季　節	季　語
（　春　）	（　甘納豆　）
（　春　）	（　あたたか　春らしい　気温　）
（　春　）	（山笑ふ　芽吹きがはじまり明るい山）

3　この季語の読まれた句の中で、私はこの句に心ひかれました。

俳　句	俳　人
（　三月の甘納豆のうふふふふ　）	（坪内稔典　）
（　あたたかや鳩の中なる乳母車　）	（野見山朱鳥）
（　故郷やどちらを見ても山笑ふ　）	（正岡子規　）
（　　）	（　　）

4　とりわけ心ひかれた句は、次の一句です。

（　故郷やどちらを見ても山笑ふ　）（正岡子規　）

・この一句に心ひかれた理由は、この句の（　山笑ふ　）ということばに、（山が笑っているように、にぎやかで、華やかな、あたたかな）思いがこめられていると感じるからです。

5　引用文献

『俳句・季語入門1　春の季語事典』石田郷子
二〇〇三年一月一〇日　国土社　三二頁

（国語学習記録「歩み」米子市立東山中学校　三年一組　T・N　二〇〇九年七月一〇日）

T・Nさんは、家族とともにパキスタンの首都イスラマバードでの3年間の生活を経て、4月に日本に帰ってきた学習者であった。

春の好きなT・Nさんは「甘納豆」「あたたか」「山笑ふ」という季節のことばと出会っている。「山笑ふ」が「芽吹きがはじまり、明るい山」になっていくようすを表していることを知って、その表現のおもしろさに心ひかれたと話してくれた。笑顔の似合うはつらつとしたT・Nさんにふさわしいことばに思われた。

T・Nさんが「山笑ふ」という季語から選び出した句は、正岡子規の「故郷やどちらを見ても山笑ふ」であった。故郷の山々がどちらを見ても芽吹きはじめ明るく感じられるという意味のこの一句を選んだT・Nさんは、「山が笑っているように、にぎやかで、華やかな、あたたかな思いがこめられていると感じる」と理由を記すことを契機として、日本に帰ってきた自らの内なる思いに心を向け、故郷のあたたかな思いを胸に感じつつ新たな生活を歩み始めていった。

夏が好きなM・Nさんの記したメモは、次のようである。

1　好きな季節

・私の好きな季節は、（　夏　）です。
・私がこの季節が好きなのは、（かき氷、海など夏のものが好きだからです。）
・私はこの季節の（　　）好きなのです。

2　季語との出会い

・歳時記をめくっていて、（　夏　）の季語にこんなのがありました。

季節　　季語　ところてん　胡瓜　さぼてん

（　夏　）（　汗　　）
（　夏　）（　昼寝　　）
（　夏　）（　さくらんぼ　　）
（　夏　）（　虹　　）

3　この季語の読まれた句の中で、私はこの句に心ひかれました。

俳　句　　俳　人

（夕月のいろの香を出す青胡瓜　）（飯田龍太　）
（仙人掌の針の中なる蕾かな　）（吉田巨蕪　）
（匙なめて童たのしも夏氷　）（山口誓子　）
（水遊びとはだんだん濡れること　）（後藤比奈夫）

4　とりわけ心ひかれた句は、次の一句です。

（　仙人掌の針の中なる蕾かな　）（吉田巨蕪　）
・この一句に心ひかれた理由は、この句の
（　針の中なる蕾　）ということばに、
（とげのなかにあるやさしさ、愛情みたいなものが）
こめられていると感じるからです。

5　引用文献

『俳句・季語入門2　夏の季語事典』石田郷子
二〇〇三年一月二五日　国土社　七八頁
（国語学習記録「私の言語生活力の向上理由」米子
市立東山中学校　三年一組　M・N　二〇〇九年七
月一〇日）

夏の似合う元気のよいM・Nさんは、ソフトボール部のキャプテンであった。夏の地区予選では苦戦を強いられ、最終枠を勝ち取って県大会へ駒を進めていた。一、二年生のときに指導していただいたソフトボール専門の顧問の先生が学校を離れられ、新しい顧問の先生とともに悪戦苦闘していた。こういう状況の中で、M・Nさんは、「ところてん」「胡瓜」「さぼてん」「汗」「昼寝」「さくらんぼ」「虹」といった夏の季語と出会い、その中から吉田巨蕪の「仙人掌の針の中なる蕾かな」を選び出した。仙人掌の「針の中なる蕾」ということばに、「とげのなかにあるやさしさ、愛情」を感じ、きびしさの中のやさしさ、愛情に心ひかれたM・Nさんは、キャプテンとして悪戦苦闘する状況の中で、自己の内なる問題を発見し、課題解決の方向を見いだしていった。この一句を選んだM・Nさんの決意を見る思いがした。M・Nさんは、その後キャプテンとしてチームを牽引し、県大会では準優勝を飾って、チームを中国大会に導いた。

秋を選んだY・Mさんは、次のようなメモを記している。

1　好きな季節
・私の好きな季節は、（　秋　）です。
・私はこの季節の（葉がかれていくさびしさが）好きなのです。

2　季語との出会い
・歳時記をめくっていて、（　秋　）の季語にこんなのがありました。

季　節	季　語
（　秋　）	（　古酒　　　　　）
（　秋　）	（　吾亦紅　　　　　）
（　秋　）	（　流れ星　　　　　）

（　秋　）（　コスモス　　）

3　この季語の読まれた句の中で、私はこの句に心ひかれました。

俳　句　　俳　人

（流れ星悲しと言ひし女かな　　）（高浜虚子　）
（コスモスや彼女意外にしたたかよ）（小河美紗子）
（雨音は濁音ばかり古酒の酔　　）（槍田良枝　）
（　　）（　　）

4　とりわけ心ひかれた句は、次の一句です。

（流れ星悲しと言ひし女かな　　）（高浜虚子　）

・この一句に心ひかれた理由は、この句の

（　悲し　）ということばに、

（流れ星を見ても悲しいとしか言えないつらい）思いがこめられていると感じるからです。

5　引用文献

『新日本大歳時記　秋』飯田龍太監修
一九九九年一〇月二九日　講談社　六一頁
（国語学習記録「前進」　米子市立東山中学校　三年四組　　Y・N　二〇〇九年七月一〇日）

秋を選んだY・Mさんは、この季節の「葉がかれていくさびしさが」好きだと記している。Y・Mさんが選んだ一句は高浜虚子の「流れ星悲しと言ひし女かな」であった。Y・Mさんは一句選ぶことを契機として自らの内に存在する感じ方と向き合い、自らの感じ方に重なる一句を選んでいる。葉がかれていくさびしさや流れ星のはかなさに心ひかれるY・Mさんの感じ方には、日本人が心ひかれてきた無常観が受け継がれている。

Y・Mさんは、学習記録の感想に「俳句という言語文化について学び、日本文化の豊かさを感じることができました。資料を活用することはたくさんの句と出会うことであり、とても興味深かったです。」と記している。ここには、俳句という言語文化との出会いを通して、自らの感じ方と向き合い、日本文化の豊かさに目を拓かれた学習者の姿が示されている。

冬を選んだB・Fさんのメモは、次のようである。

1　好きな季節

・私の好きな季節は、（　冬　）です。

・私はこの季節の（降り積もる新雪を見るのが）好きなのです。

2　季語との出会い

・歳時記をめくっていて、（　冬　）の季語にこんなのがありました。

季　節	季　語
（　冬　）	（　冬の日　冬日　冬日向　冬日影　）
（　冬　）	（　冬の空　寒空　寒天　冬天　凍空）
（　冬　）	（　冬霞　寒霞　）
（　冬　）	（　息白し　白息　気霜　）

3　この季語の読まれた句の中で、私はこの句に心ひかれました。

俳　句	俳　人
（　冬の日や前に塞がる己が影　）	（　鬼城　）
（　凍空の鳴らざる鐘を仰ぎけり　）	（　蛇笏　）
（　寒凪や障子張りてより空蒼き　）	（　南天子　）
（　冬霞ぽとりと落ちし葉一枚　）	（　桐華　）

4　とりわけ心ひかれた句は、次の一句です。

（　家をさる柩のはやき冬日かな　）（　蛇笏　）

・この一句に心ひかれた理由は、この句の

（　さる柩のはやき冬日　）ということばに、

（短い冬の日では、亡くなった人の足取りも早くなってしまう、愛しかった人の思いとの別れが早いという）思いがこめられていると感じるからです。

5　引用文献

『最新俳句歳時記　冬』　山本健吉
一九七二年一二月一日　文藝春秋社　三〇頁

（国語学習記録「一語一恵」　米子市立東山中学校
三年一組　　B・F　二〇〇九年七月一〇日）

冬を選んだB・Fさんは、冬の季語として、「冬の日」「冬の空」「冬霞」「息白し」を拾いあげている。さらに、「冬の日」に関することばとして「冬日」「冬日向」「冬日影」を、「冬の空」に関することばとして「寒空」「寒天」「冬天」「凍空」を、「冬霞」に関することばとして「寒霞」を、「息白し」に関することばとして「白息」「気霜」をメモしている。

これらの季語が詠み込まれた句を記したうえで、B・Fさんは、心ひかれる一句として、飯田蛇笏の「家をさる柩のはやき冬日かな」を選んでいる。B・Fさんは、冬の句を選ぶにあたって、この冬に亡くなった祖母との別れという自己の内なる悲しみと向き合い、この句を読むと自分をかわいがってくれた祖母の柩が冬の日に家を去っていったことを鮮明に思い出すと話してくれた。

第二次の学習では、学習者は学習のてびきに手をひかれて学習に没頭していった。学習者一人一人が、自己の内なる問題と主体的に向き合い、一句との出会いを求めて、歳時記をはじめとする資料を読んでいった。学習者の姿を目の当たりにして、俳句という言語文化の魅力を改めて実感した。真剣に資料を読みなさいなどという必要はなかった。季語を話題として、自然な形で対話する機会も豊富に得た。俳句を話題として学習者一人ひとりと対話し、内なる問題を発見させていくこともできた。

第3次では、清書した一句を実際に示しながら、発表し合う場を設定していた。学習者は発表を意識して、文字の大きさ、美しさに配慮しながら、清書した。

第三次　発表会、コメント交流、学習を整理する　（一時間）

①私の出会ったこの一句を発表し合う。

②コメントを書き合う。

③学習全体を通して、学び得たことを書き、学習記録を整理する。

第三次は、発表の場である。伝え合いたいという気持ちが自然に高まっていることを感じた。提示資料を示しながら、季節ごとに発表し合い、コメントを書き合う学習活動を展開した。前年度から担当している学習者であり、ペアでの発表やグループでの発表の場を経験させてきたため、この単元では、これまでの学習をふまえて、全体の場での発表に取り組ませたいと考えていた。全体発表により、春夏秋冬、全ての季節の句と出会うこともできると考えた。

発表の際、メモを見て読むのではなく、提示資料を示しながら話すよう指導した。そのために、提示資料の裏に鉛筆でメモを書かせ準備を整えさせた。そのうえで、実際にこのように発表するとよいというモデルを、指導者である私自身が実際にやってみせたうえで、練習の時間を設けた。

聞く側には、発表がよいものとなるかどうかは、聞き手がかぎを握っていると伝えた。よい聞き手となるよう、やさしい表情で対面し、あいづちをうつなど、発表者の受けとめを尊重しながら聞く姿勢が大切であると指導した。また、季節ごとに最も印象に残った句を発表した人に向けて、コメントを短く書くという交流の場を設定した。

発表会は緊張感のある充実したものになった。発表される俳句は、発表者が自己の内なる問題と向き合う中で選び出された

ものであり、個性があふれるものばかりであった。

最後に、学習全体をふりかえり、自らの学びを見つめなおして、自己評価を行う場を設定した。学習者は学習記録を整理することを通して、学び得たことを自覚し、課題を見出していく。同時に、指導者にとっては、単元の目標に即して成果と課題を見いだす貴重な材料を得る場となる。

K・Wさんは、学習を終えて学び得たことを、学習記録に次のように記している。

俳句という言語文化について、今までは俳句というと、昔っぽさがあると思っていたけど、結構今風のものもあって、びっくりしました。また、俳句というものは、とてもしゃれているものが多くて、読んでいくと、どんどんはまっていくほど、良い俳句ばかりでした。こんなすばらしい俳句という言語文化を、未来にも、つなげていってほしいと思いました。

（国語学習記録「つながり」　米子市立東山中学校　三年四組　K・W　二〇〇九年七月一四日）

K・Wさんは、「読んでいくと、どんどんはまっていく」「こんなすばらしい言語文化を、未来にもつなげていってほしい」と記している。ここには、「俳句についての関心を高め、尊重し、継承していこうとする態度を育てる」という第1の目標を達成した、俳句という言語文化の魅力に目を拓かれ、俳句という言語文化に関心を持ち、今後も尊重し、継承していこうとする学習者の姿が表れている。

また、N・Kさんは、学習記録に次のように記している。

俳句という言語文化にふれて、最初は俳句は昔の文化だから今の自分達とは考えがちがうんじゃないかと考えていました。しかし、きちんと勉強してみて、たくさん自分と同じ考えの俳句があってすごく興味を持ちました。資料を活用して、自分が思った以上に、気に入った俳句があってどれも心ひかれました。また、私の見た文献は、テーマに松田聖子などもあって現代という感じのする俳句もたくさんあるなぁと思いました。発表してみて、少人数ではなく、全員の前でというのははじめてだったので、少し緊張しましたが、いい経験ができて良かったです。また機会があれば、もう少し上手にやりたいです。

（国語学習記録「私の成長記録」　米子市立東山中学校　三年四組　N・K　二〇〇九年七月一四日）

第２の目標としていた、学校図書館を利用し、その機能を効果的に活用する能力を身に付けさせるとともに、読書を生活に役立て自己を向上させようとする態度を育てるという点についても成果をあげることができたと考える。それはＮ・Ｋさんの「資料を活用して、自分が思った以上に、気に入った俳句があってどれも心ひかれました。また、私の見た文献は、テーマに松田聖子などもあって現代という感じのする俳句もたくさんあるなぁと思いました。」という感想に表れている。Ｎ・Ｋさんの活用した資料は、黛まどかの『恋する俳句』（１９８８年８月８日　小学館）であり、携帯による俳句やブログに掲載された俳句など新しい感覚の俳句が取りあげられている。このように実際に図書館を利用して、資料を効果的に活用する体験が、主体的、能動的に学んでいく力を育てることにつながるものと考える。そうした実の場の計画的な設定が今後の課題である。

また、Ｈ・Ｔさんは、学習記録に次のように記している。

それぞれの季節にたくさんの季語があり、同じものでも違う表現で雰囲気がかわっておもしろいと思いました。一句に対しても感じ方というのに、その人の個性が表れていいなと思いました。

（国語学習記録「架け橋」　米子市立東山中学校　三年一組　Ｈ・Ｔ　二〇〇九年七月一五日）

第３の目標として示した「俳句における季語や一語一語の重みを実感させ、ことばへの関心を深めることができる」ということについても、手応えを感じることができた。第２次でとりあげた学習者が記したメモには、多くの季語、俳句が記され、学習者一人ひとりが自らの内なる問題と向き合い、一語一語の重みをふまえつつ、自己の課題を解決していったようすが如実に示されていた。

Ｈ・Ｔさんは「それぞれの季節にたくさんの季語があり、同じものでも違う表現で雰囲気がかわっておもしろいと思いました。一句に対しても感じ方というのに、その人の個性が表れていいなと思いました。」と記しており、たくさんの季語との出会いや交流を通して、ことばへの関心を深めていることがうかがえる。

おわりに

本単元の学びを通して、学習者一人ひとりが自らの好きな季

節を起点として、たくさんの季語、俳句と出会っていった。心ひかれる一句を選び、その理由を書くことによって、自己の内なる問題と向き合い、自らにとっての一句の意味を問い、心ひかれる一句を真に自らのものにしていった。その過程において、学校図書館を活用しつつ、ことばへの関心を深め、俳句という言語文化を尊重し、継承していこうとする態度を育て得たことが大きな成果である。

本稿では、「単元　一句との出会い　―心ひかれる季節のことば―」をとりあげ、単元の実際に即して、それぞれの学習者がことばの学びを契機として、どのように自己の内なる問題と向き合い、問題を発見し、課題を解決していったかということを明らかにした。第二次の学習者のメモに基づいて具体的に考察したように、それぞれの状況に生きる学習者一人ひとりが、俳句という言語文化の学びを契機として、自己と向き合い、自己の内なる問題を発見し、学習記録に書き、考える活動を通じて、課題の解決を図っていったことを実証した。学習者は一句との出会いを通して自己の内なる問題を発見し、書き、考える活動を通じて、課題を解決しており、本単元は「学習のプロセスがそのまま学習力となる」営みの一つのモデルとしてとらえることができると考えている。

学習を真に学習者一人ひとりにとって価値あるものとするために、ことばの学びを通して自己の内なる問題を発見させ、課題を解決させていくことは極めて重要な意味を持つ。

今後の課題として、実践してきた他の単元についても、「自己の問題と向き合う」という観点から考察し、自己の国語教室の特質を実証的に明らかにすることを通して、単元学習における「自己の問題と向き合うこと」の重要性を明らかにしていきたい。

注1　『月刊国語教育研究　五一五』（日本国語教育学会編　二〇一五年三月　一頁）

2　「この一首をあの人に」の鑑賞文は、『鳥取県中学校作文集　きゃらぼく　第三一集』（鳥取県中学校教育研究会国語部会編　平成一〇年二月一五日）に掲載されている。

3　「『うた』に託して思いを伝える学習指導の試み　単元　この一句をあの人に」は、第一五回鳴門教育大学国語教育学会並びに、第二二回中国地区国語教育研究大会において発表。『両輪　第三四号』に詳細を収録。「それぞれの詩（歌・句）をだれかに贈ることにし、なぜその人に贈るかを書く」という学習活動は、大村はま先生に学んでいる。

4　「単元　一句との出会い―私の出会ったこの一句―」は、第二〇回島根大学教育学部国文学会研究発表会にて発表。

5　「言語文化への関心を深める学習指導の試み―単元　和歌を受け継ぐ―」は、第二〇回鳴門教育大学国語教育学会におけるシンポジウムにて発表。『月刊国語教育二〇〇五年六月号』（東京法令出版）に詳細を収録。

6　三好達治の俳句を学習材とした俳句の指導は、西郷竹彦氏のプランによるものである。『文芸教育六〇号』（明治図書　一九九二年五月）参照。

＊本稿は、第5回大村はま記念国語教育の会研究大会鳴門大会における実践研究発表に基づいている。

（いぎ　ひろし／本学准教授）